

研究雑話 (81)

人間発達の物質的基礎 (四五)・結び (五)、擬音・擬態語の利用による韻律生成回路の増強。

藤井力夫

前回は、聴覚からの聞き取り単位が拍節二音で、三三〇ミリ秒程度ということ、及び復唱にあたっては七音あたりが最適で、これにともなう休みの存在 (四五〇ミリ秒程度) が文脈理解を予期的にしているということ、これらについてお話ししました。韻律生成の基本回路 (音韻ループ) をこうした内容で仮定するならば、呼吸や動作との同期の関係も自然なものに理解できるでしょう。この間、他方でお話してきた「足拍二音」の原理 (歩行のサイクル内リズムと拍節リズムとの位同期、雑話六四・七三等) もいっそう根拠を得ることになります (「動作学誌上実習」で後述)。手足の共同運動の発現に姿勢反射の増強が必要なように、ことばの自由な表現のためには、韻律回路の増強が重要です。乳幼児におけるこうした回路の増強に、「ワンワン」、「ニヤンニヤン」等、擬音語、擬態語が、一貫して重要な役割を担っているように思われます。視覚的なものと音響的なものとの結合が、自然な復唱をもたらし、効果するのでしよう。「人間発達の物質的基礎」を閉じるにあたり、こうした自然な設定の優位性についてお話ししたいと思います。

先の「ワンワン」などは実際に聞き取る音で、擬音語 (擬声語、オノマトペ

ア) と言ひ、聴覚以外の感覚で様子を表す、「てくてく」、「ぴかぴか」などは擬態語と言ひます。いずれも動作の説明に好都合で、動詞句を導きます。動詞の出にくい知的障害や、韻律のおかしさを合わせ持つ自閉症児にとつて大事なことばです。

図A、Bは、実際にこうした子どもたちに適用し、効果をあげているリズム譜です (堀田喜久男、一九九二)。歩く、寝る、走る、泣く、笑う、怒るなどの動詞が、『絵』と『ピアノ』で誘発されます。「のっしのっし」、「グーグー」、「もうも

う」、「ニタニタ」、「ウーウー」などのことばの韻律が、フレーズとしてのまとまりを引き出します。利点を列挙してみましよう。①、擬音・擬態語は拍節二音の反復を基本とし、聞き取り単位の反復で復唱し易い。②、「あ、あ、あるく」、「のっしのっしのっし」と、前者は一三三 (三三三の変形) で動詞を言い、後者は七音割り当てで、動作の様子を語感とともに増幅し、準備をつくります。③、音高の基本が二つ (ソとラ) で、終止だけさらに低い音 (ミ) を用い (民謡音階)、ことばのアクセントのままに歌われます。④、視覚的なものと聴覚的なものが無理なくことばで表現され、フレーズとしてのまとまりで韻律生成回路が増強されています。

(北海道教育大学教授)

A.



(堀田喜久男: 1992)

B.



あ あ あるく、 う し が あるく。
のっし のっし のーし、 う し が あるく。

1.	ね、	ね、	ねー	る、	う	し	が	ねー	る。
	グー、	グー、	グー	ウ、	う	し	が	ねー	る。
2.	は、	は、	はし	る、	う	し	が	はし	る。
	ダ、	ダ、	ダ	タ、	う	し	が	はし	る。
3.	な、	な、	な	く、	う	し	が	な	く。
	もう、	もう、	も	う、	う	し	が	な	く。
4.	わ、	わ、	わ	ら	う、	う	し	が	わ
	ニタ、	ニタ、	ニ	タ、	う	し	が	わ	ら
5.	お、	お、	お	こ	る、	う	し	が	お
	ウー、	ウー、	ウ	ー	う	し	が	お	こ

C. 擬音語・擬態語の表現力: 例、「ころ」の場合。

①、ころ: 反転を表す。 ②、ころっと: 転がりかけること。 ③、ころんと: 弾んで転がること。 ④、ころりと: 転がって止まること。 ⑤、ころころ: 連続して転がること。 ⑥、ころんころん: 弾みをもって勢いよく転がること。 ⑦、ころりころり: 転がっては止まり、転がっては止まること。 ⑧、ころりんこ: 一度転がりはしたが、最後に安定して止まって、二度と転がり